

## 『苦海浄土』における病者の表象——

### 「五月」における「ゆき女」の描写を 中心に

林宜蓁

#### 第1章 はじめに——先行研究と小論の目的

「ゆき女きき書」は石牟礼道子の三部作『苦海浄土』第1部の第三章である。「五月」と「もう一ぺん人間に」の二節によって構成される「ゆき女きき書」は、もともと石牟礼が1959年5月に一市民として初めて水俣病患者坂上ゆきを見舞い、その経験を「水俣湾漁民のルポルターージュ 奇病」(『サークル村』1960年1月号)として発表したことに起源を持つ。同文章はその後「海と空の間に／第五回 坂上ゆきのきき書より」(『熊本風土記』1966年6月号)に改稿され、最終的に『苦海浄土-わが水俣病』(1969年1月講談社)の「第三章 ゆき女きき書」として位置を占めることになった。

「ゆき女きき書」は石牟礼が水俣病患者について初めて書き下ろした文章にあたるので、『苦海浄土』研究に大きな意義を持つものとして、これまでも多く言及されてきた。重要なものを二つ挙げるのであれば、講談社文庫版の渡辺京二「解説」<sup>1</sup>、そして井上陽子『『苦海浄土』の円環構造』<sup>2</sup>であろう。渡辺は、「ゆき女きき書」は「聞き書」ではなく、ルポルターージュでもなく、実際は私小説であると主張し、『苦海浄土』の「文学」性を強調した<sup>3</sup>。井上は、「ゆき女きき書」の文体のルーツは「サークル村」の経験にあると示唆している。「サークル村」は1958年9月、炭鉱地帯であった筑豊において創刊された『サークル村』をはじめ、『無名通信』などを刊行した運動団体である。中心的な人物には谷川雁、上野英信、森崎和江がいた。三池闘争を経て労働運動が活発化する時代の中で、それまでの文化活動と異なる、地域や性別を超えた連帯を地方から打ち出そうとした人々である。雑誌『サークル村』の創刊宣言<sup>4</sup>では、文化を個人の創造物とみなす観点を打ち破り、新しい集団的な担い手による「集団創造」を理念とすることが掲げられている。集団語りの方法を重視し、特にメンバーであった森崎和枝が運営した女性の声を発信する雑誌『無名通信』は石牟礼に大きな影響を与えた。森崎は女坑夫の精神世界を記録するため、女坑夫の生活言語、つまり方言によって語る「聞き書」の文体で「スラを引く女たち」を書いた(1959年7月から連載、後に「まっくら」と改題)。その半年後に、石牟礼は森崎が開発した創作手法を踏まえ

て「五月」の原型となった「水俣湾漁民のルポルターージュ 奇病」を書いたのである。

井上は「五月」について、方言の使用と聞き書という文体の創出によって、「逃亡を許されない魂たち」のため、「もう一つのこの世」を描き出す武器を確保する要の章であると論じている。石牟礼が描きたい世界は、汚染前の水俣ではなく、現実と幻の間で想起される世界であるという。それはまたゆき女が語った世界であり、同時にそれから40年の時を経て、石牟礼が最後に執筆した章「実る子」の母たちの祈りの中の浄土世界でもあるという。つまり最後に描かれた世界が最初に描かれたのと同じ世界に戻るといふ作品の円環構造を井上は指摘している<sup>5</sup>。

この論文では、そうした先行研究を踏まえながら、「ゆき女きき書」の第一節「五月」を中心として、『苦海浄土』における病者の表象を考察したい。その際、日本中世の六道絵のひとつである『病草紙』に描かれた病者の表象を比較の手がかりとしながら、あらたな視点を投げかけたいと思う。

#### 第2章 「五月」におけるゆき女の描写から見た『苦海浄土』の病気の語り方

「五月」の語りは、四つの層から構成されている。一つ目は医学的診断の語り、二つ目は石牟礼とみなされる語り手「わたくし」の一人称による語り、三つ目は「ゆき女」の「断綴性」言語による語り、四つ目は「ゆき女」の一人称の語りである。それぞれは近代科学的な「客観的」記述、昭和時代の知的かつ文学的教養を備えた標準語による書き言葉の叙述、「ゆき女」の言語の病態をそのまま伝える語り、そして「ゆき女」が「うち」を一人称としながら方言で流暢に語る語りという異なるテキストの位相をもつ。これらの語りの層の実態をしばらく吟味したい。

##### 第1節 医学的診断書の記述

水俣市立病院水俣病特別病棟 X 号室  
坂上ゆき 大正三年十二月一日生  
入院時所見

三十年五月十日発病、手、口唇、口囲の痺れ感、震顫、言語障碍、言語は著明な断綴性蹉跎性を示す。歩行障碍、狂躁状態。骨格栄養共に中等度、生来頑健にして著患を知らない。顔貌は無欲状であるが、絶えず Atheotse 様 Chorea (舞蹈病) 運動を繰り返し、視野の狭窄があり、正面は見えるが側面は見えない。知覚障碍として触覚、痛覚の鈍麻がある<sup>6</sup>。

臨床所見を記載する診断書のめざすところは、「病氣」と「症状」を科学的・客観的に説明することにある。「五月」の冒頭で診断書の原文をそのまま提示することは、未曾有の「奇病」が住民に齎した前代未聞の困惑と違和感を、科学の装いをまとった「無感情」で無機質な文体に対応させていると言うことができる。予測不能な災難として、「奇病」が身近に発生した心地悪さを医学的診断書はそのまま伝えていくようである。

病の語り、もしくは疾病の描写は「病氣」そのものよりも「症状」を描くことが通例である。一般人にとって病とは症状そのものであり、「病氣」の正体はあくまで各文化がもつ医学的知識の体系のなかで位置づけられる可変的な項目にすぎないからである。「病氣」とは個人が経験する「症状」であり、いつの時代にあっても個人の経験する病状こそが本人と周囲を巻き込む中心的な要素なのである。ただし「症状を描く」ことは決して容易なことではない。痛みや違和感などは病者自身にとっていかにほどの強度を持つともそれは主観的な感覚であり、言語で表現することはある程度の困難が伴う。一方、「振戦」「舞踏病」「言語障害」などの術語はその知識の体系内での普遍性を有している。石牟礼はまず「奇病」にかかった患者を近代医学体系のなかにおいてその姿を一定の距離をもって客観的に提示しようとする。Atheotse や Chorea のような術語をそのまま使用し、一般の読者に緊張と、日常と不連続な不穏な空気感（それは実際に術語を理解できる専門家にとっては病状の深度を示す情報ともなりうる）を与えることによって、患者と健常者、水俣と水俣以外の地域、日本語と外国語など自明に見える領域に亀裂を走らせる。あらかじめ予想された「文学」の読者の足場をいきなり揺るがせる働きを持つのである。

後に現れる熊本医学会雑誌（第三十一巻補冊第一、昭和三十二年一月）の「猫における観察」の段落にも同じような効力が観察される。一部を以下に引用する。

全身痙攣ハ約三十秒ナイシー一分ツヅキ、ツイデ猫ハ起キアガリ、付近ヲ走りマワル。コノ場合走りダシタラ止マルコトヲ知ラズ、狭イ部屋デハ、壁ニブツカッテ向キヲ変エテ走り、反対側ノ壁ニ突進スル、トイッタ状態デ、水俣地方デ水ニ飛ビコンダトイワレルノハ、オソラクコノヨウナ状態デアッタト思ワレル<sup>7</sup>。

これらの医学的文書の引用は、一主婦として水俣病というテーマに挑む石牟礼に対する不信の眼差しに対抗するために科学的な「信憑性」を借りるという目的も含まれているかもしれない。しかしそれは同時に水俣病という病の経験が文化的に形作られる過程を示している。現在では読み辛いカタカナ表記の報告書を読むと、研究・治療者側が徹底した唯物主義的視点から病の生物学的メカニズムを追求しようとしていることがわかる。病は治療者にとっては「解決すべき問題」である。つまり、病は生物学的な構造や機能におけるひとつの変化としてのみ再構成される<sup>8</sup>。自己コントロールを失った猫の悲惨、ゆき女の発話障害と行動障害が齎している生活の絶望的な変化と恐怖、家族のショック、生計の不可能と経済的な困窮が記述されず注目されないままになっているのは、読者がこれらの医学的文書に感じる冷たい違和感の原因と言えよう。

## 第2節 石牟礼とみなされる「わたしく」の第一人称の語り

石牟礼とみなされる語り手「わたしく」の一人称による語りには、語り手は自分の行動を時間順に描写している。語り手は昭和34（1959）年5月下旬に水俣病患者坂上ゆきを見舞うため、病院に赴いた。窓外は五月の「濃い精気を吐き放っている新緑の山々や、やわらかくくねって流れる水俣川」<sup>9</sup>など、絵のような美しい田園風景が広がっている。「熟れるまぎわの麦畑やまだ頭頂に花をつけている青いそら豆畑」<sup>10</sup>の描写は、石牟礼自身の感覚だけではなく、漁業と農業に携わってきたゆき女の視線が重ね合わされているだろう。それは「わたしく」の一人称文体からゆき女の一人称語りへの移行の伏線ともなっている。

ゆきの病室に辿り着く前に、水俣病特別病棟の二階廊下を通過した時、語り手は水俣病患者のうめき声に恐怖を感じる。「わたしく」が最初に感じ取った水俣病患者独特の表象は彼らの「声」である。

それは人びとのあげるあの形容しがたい「おめき声」のせいかもしれなかった。「ある種の有機水銀」の作用によって発声や発語を奪われた人間の声というものは、医学的記述法によると“犬吠様な叫び声”を発するというふうを書く<sup>11</sup>。

その恐怖の正体は、人間が人間性を失うことにあ

る。水俣病患者の人間性は有機水銀によって溶けて流失してしまうかのような表現である。人間よりは動物を彷彿とさせる描写はこれ以外にも頻出している。「ゆき女」との出会いの前、石牟礼は釜鶴松と出会うが、釜鶴松との出会いは彼女に衝撃を与え、彼女が意思を決定する重要な要素となる。次のような表現がある。

この日はことにわたくしは自分が人間であることの嫌悪感に、耐えがたかった。釜鶴松のかなしげな山羊のような、魚のような瞳と流木じみた姿態と、決して往生できない魂魄は、この日から全部わたくしの中に移り住んだ<sup>12</sup>。

上野千鶴子はこのくだりについて次のように述べている。「釜鶴松が彼女に『乗り移』ったのか、彼女が患者に憑依したのか。共振する魂は口寄せのいたこのように、どこにもないことばを紡ぐ。この本のなかに出てくる土地ことばがほとんど、なんの「翻訳」も要せず、日本語話者に伝わるのは、それが方言ではなく、彼女が創作した媒介語だからにちがいない<sup>13</sup>。これは言い換えれば、石牟礼は水俣病患者に憑依された、あるいは、水俣病患者に憑依されることを自ら招いた、ということである。この「憑依」の正体は「悶え神」だと論者（林）は考えている。水俣の人々は、他人の不幸をわがことのように感じ、なんとかしたいと悶える心性の持ち主を「悶え神さん」と呼ぶ。側に苦しみ悩む人がいれば、その人の身になって苦しみ、悩み、悶える。「悶える」というのは相手のことを想像したり、相手の立場に立ったり、相手を寄り添ったりすることを指す。悶え神に「変身」した彼女は水俣病患者を代弁できるようになるため、ゆき女の描写が第一人称に変わる。これは釜鶴松の描写をゆき女の描写の前に置く理由だと考えられる。

### 第3節 「ゆき女」の「断綴性」言語による語り

語りの第三層である坂上ゆきからの「聞き書き」を模した一人称独白体は、「坂上ゆき」の人間の側面を描き出してゆく。「サークル村」の一環として『無名通信』(サークル村の女性たちが『無名通信』雑誌を創刊した)の経験から受け継いだ語り、すなわち患者が自らの暮らしの言葉、つまり方言を駆使して語るという文体は、浄瑠璃の「さわり」のように、独自のリズムと情動性を生み出していく<sup>14</sup>。

う、うち、は、く、口が良う、も、もと、らん。案じ、加え、て、聴いて、は、はいよ。う、海の上、は、ほ、ほん、に、よかった<sup>15</sup>。

これは医学的に見れば水俣病特有の「断綴性」言語であるが、一方で『苦海浄土』の世界では初めて水俣病患者がみずから発する言葉でもある。この言表は「五月」冒頭の臨床的診断書の記述と同じような驚きをあらためて読者に与える。この「断綴性」の語りは言語障害・発音障害がゆき女の生活にいかにも壊滅的な影響を与えるのかを如実に伝えると同時に、客観的な臨床的診断書の記述から大きく離れて、「奇病」を病んだゆき女の実存そのものを語ろうとする。語りの第二層である「わたくし」の一人称の語りは、知的で健全な語り手からの視点であり、病者を距離を置いて見るところがあるが、この病者の一人称の語りに至って、読者はやっと水俣病患者自身の「苦海」の渚にたどり着くと言えるだろう。「海の上、は、ほ、ほん、に、よかった」は音楽の主旋律再現部 (recapitulation of a theme) のような文言で、この後も何回も繰り返されることになる。繰り返されることによって災厄の悲劇性が高まり、石牟礼も読者もそれに圧倒されるようなピークに達するが、作品はそこから一転して「浄土」のような情景へと変容してゆく。

### 第4節 「ゆき女」の一人称の語り

ゆきの一人称による断続的な語りはやがて流暢な語りに変化する。次にそれは読者になんの不自然さも感じさせずに、たくみに三人称小説体での文章をさしはさみながら、ゆき女と夫茂平の漁師生活がこの上もなく眩しく、まるで天国のような幸福感を滲ませながら語られてゆく。それは海上の桃源郷であり、現実を超えた次元の世界の描写にも見える。

茂平やんの新しい舟はまたとない乗り手をえて軽かった。彼女(ゆき女)は海に対する自在な本能のように、魚の寄る瀬をよくこころえていた。そこに茂平を導くと櫓をおさめ、深い藻のしげみをのぞき入って、

「ほーい、ほい、きょうもまた来たぞい」と魚を呼ぶのである。しんからの漁師というものはよくそんなふうにいるものであったが、天草女の彼女のいいぶりにはひとしお、ほがらかな情がこもっていた。

海とゆきは一緒になって舟をあやし、茂平やんは不思議なおきな心になるのである<sup>16</sup>。

そのようにゆき女と茂平の生活は「魚はとれすぎるといふこともなく、節度ある漁の日々が過ぎた」<sup>17</sup>。ここで注目すべきことは、ゆき女の能動性である。五十代の茂平は四十代のゆき女の本能を信じて漁を

行っている。ゆき女の女性性と海、そして海中の生物が調和的に共鳴し、海自体が母性の体現となっている。それは夫の茂平にあたかも母親の羊水の中で眠るような安らぎを与えている。

もう一つ注目したいのは、この一人称の語りの漁の場面で描写される生物が、非常に人間的に描かれることである。病棟におけるゆき女の一人称の語りにおいては人間が動物のような形姿で捉えられ、そこに「人間性」の喪失の悲しみを表現する箇所があったが、漁の場面では逆に人間以外の生物がきわめて人間的に描写される。人間と動物が対等な位置をもつ楽園的な世界である。それは石牟礼の理想的な世界のひとつの体現、つまり「浄土」と考えることができる。

舟の上はほんによかった。

イカ奴は素っ気のうて、揚げるとすぐにぶうぶう墨ふきかけよるばってん、あのタコは、タコ奴はほんにもぞかとばい。

壺ば揚ぐるでしょうか。足ばちゃんと壺の底に踏んばって上目使うて、いつまでも出てこん。こら、おまや舟にあがったら出ておるもんじゃ、早う出てけえ。出てこんかい、ちゅうてもなかなか出てこん。壺の底をかんかん叩いても駄々こねて。仕方なしに手網の柄で尻をかかえてやると、出たが最後、その逃げ足の早さ早さ。ようも八本足のもつれもせずに良う交して、つうつう走りよる。こっちも舟がひっくり返るくらいに追っかけて、やっとならにおさめてまた舟をやりおる。また籠を出てきよって籠の屋根にかしこまって坐っとる。こら、おまやもううち家の舟にあがってからはうち家者じゃけん、ちゃんんと入とれちゅうと、よそむくような目つきして、すねてあまえるとじゃけん。

わが食う魚にも海のものには煩惱のわく。あのころはほんによかった<sup>18</sup>。

石牟礼は田中優子との対談で、「何にもなくなってしまって、絶望のどん底に落ちた時初めて、祈ることを見たり体験したり、生物たちとの連帯感を感じたりするんじゃないでしょうか」<sup>19</sup>と述べている。前述の臨床的診断書の記述、石牟礼とみなされる「わたくし」の一人称の語りとゆきの一人称による語りは、徐々に「苦海」の深いところに踏み込んでいく感覚を読者に与える。『苦海浄土』の第一章「椿の海」の最初の弘法大師和讃から引用している句「繋がぬ

沖の捨小舟 生死の苦海果もなし」からも、「苦海」の絶望を徹底的に味わって、繋がぬ沖の捨小舟のように全てを諦めて、祈るしかない経験を経て、そこから生物との連帯感を得るに至るというプロセスが見えるだろう。

### 第3章 『病草紙』と「ゆき女きき書」との病者像の比較

#### 第1節 病気と人間社会

病気は人間の経験である。さまざまな病気に罹患し、症状とともに生きることによって、人間は固有の生を紡いでいく。病気の経験は日常生活はもちろん、思想、感情、家庭、職場、経済、対人関係、社会政策と切っても切れない強い関係性を結び、多くの人が罹る病は時に時代を変える影響力さえ持つ。

古来、人類は常に疫病に翻弄されてきた。人々はそれを神仏の意向とも、政権の衰亡とも、霊的な存在の仕業とも読み解いた。近世以降は世界の各地で人の行き来が盛んになることにより麻疹、結核、梅毒、コレラなど数多くの伝染病が世界的な規模で多発し、蔓延することになった。医学はそれに対抗すべく隔離、検疫、予防接種などの対策を実施してきた。

日本では近世期の人々を苦しめた「御役三病」と呼ばれる天然痘、麻疹、水疱瘡は、高い致死率のため非常に恐れられた。「疱瘡（天然痘）すむまでわが子と思うな」と言われるほど流行のたびに子供の命を奪った。1822（文政5）年と1858（安政5）年のコレラ大流行の際も夥しい死者が出た<sup>20</sup>。有効な治療法が確立されていない時代、これらの疾病の流行は、社会に大きな混乱と不安をもたらした。伝染病に制圧のきざしが見えたとき、今度は公害病が発生しはじめた。日本の高度経済成長期には、重化学工業化のために産業公害が拡大し、四大公害事件と言われる水俣病、新潟水俣病、イタイイタイ病、四日市ぜんそくが発生した。社会発展の副作用であり、産業化・工業化の代償を一番無力な一般市民に負わせた現象といえるだろう。

病はその時代や社会の価値観と密接に結び付いている文化的表象である<sup>21</sup>。それゆえに芸術——特に絵画・文学——における病者の表象を解釈することによって、病に対する人々の無意識と、病者に対する忌避・受容・黙認の仕組みとプロセスを観察できるだろう。本論における病者の表象研究は症状の苦

痛だけではなく、周囲がその病をどう受け止めているか、また病を核としたコミュニケーションや共同体形成までが含まれる。その探究は将来的に病者がどのようにして社会の一員として生きるべきかということにも示唆を与えるだろう。

## 第2節 『病草紙』における病者の表象

近代医学到来以前の病気が、かならず悲惨で救いのない表現で描かれたと考えるのはまちがいである。「病」はときに患者以外の人間にとって好奇の対象であり、周囲の人間の精神を賦活する「娯楽」もしくは「気晴らし」としての役割を果たすときもあった。十二世紀前半の成立と見られる『今昔物語集』には、病や医師にまつわる滑稽譚や奇譚が数多く採録されている。平安終わりから鎌倉時代初期に描かれた『病草紙』には数々の病気の表象がリアルに描かれている。それは症例集であると同時に説話絵巻であり、多義的な読み取りが可能である。日本美術研究者の佐野みどりは、『病草紙』を症例集的な先行作品を基盤に、卑俗な説話的趣味と宗教的契機が結合した作品と位置付けている<sup>22</sup>。

『病草紙』の大きな特徴のひとつは、21作中の11作に、病に悩む病者の周囲に、病者を見てそれを楽しんでいるかのような傍観者が一人かそれ以上描かれていることである<sup>23</sup>。あるいは、病者の異様な容形や尋常ならざる症状を傍らにしながら、淡々と日常生活をこなしているように見える健常者が描かれていることである。例えば「眼病治療」の巻には、男性が白内障の治療で目に針を刺され、血が噴出している場面が描かれている。男性の隣には一人の女性がそれを間近に見てあきらかに楽しそうに笑っている。現代に生きる私たちから見れば、多かれ少なかれ違和感を感じざるを得ない場面である。

『病草紙』は後白河法皇が発注したものであるという説があり、仏教でいう「六道」のひとつを構成するメディアとして考えられる。それはとりもなおさず病気の「苦」を伝えるが、医学書あるいは治療の参考書とは考えられないこの奇病の絵巻に一種の「エンターテインメント」性があることも否めない。その時代で「まなざし」の快楽を獲得できる現実の立ち位置が、権力の高みにいることを示す象徴的な立場と同義にされていた<sup>24</sup>。権力的な視座からは、特異な身体は興味惹かれる「まなざし」の対象になるだろう。身近にいる実際の病者は忌避されるが、絵画化された特異な身体を眺めることは、むしろ権

力の好むところであったのである。他人の苦しみを見て自身の幸せを再確認、奇妙なものを見るときに得られる知的刺激もあって、病気をエンターテインメントに昇華している作品とも言えるだろう。

仏教には「四苦八苦」という概念があって、その内容は生老病死という人間の根源的な苦しみ以外に、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦という、人間が生きている上で避けては通れない苦しみから構成されている。そうした人間的な諸々の「苦」に対して、当時隆盛した浄土教は「極楽」への往生という観念で対抗しようとした。来迎図を見ると、菩薩たちは楽器を手にしながら踊っている姿で下降してくるのである。浄土宗はこの浄土の思想とイメージで、生に対する執着をも端的に解除した<sup>25</sup>。

「六道絵」は浄土のイメージとは逆に、衆生が輪廻する地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天の六道を主題とした絵である。苦難の相を切実に描写し、教化の材料としたものである。『病草紙』は「六道」の中でも「人道」の苦しみを描いたものと考えられている<sup>26</sup>。

そうした人間の「苦」を描出する『病草紙』の病者の傍らに、それを見て一見楽しそうに笑っている健常者が描かれていることは、少し不思議なことである。これについて、植田美津恵は、『病草紙』には、病者や障害者を笑う人々、また笑われる人々が描かれるが、両者とも笑うことしか解決策を持たなかったのではないか。その笑いは、中世の庶民に急速に普及した仏教、特に地獄のイメージを具体化し、病や死を因果応報の観点から説く新しい精神革命の元に、死や病に対する恐れを抱きつつ、それでも生き抜いていかねばならない運命を受け入れている。中世の庶民は、度重なる天変地異は災いであると同時に、身に降りかかる予測不能なありとあらゆる災難に対し、深い諦めの中でも生き抜いていく力が庶民にはあったのだ」という意見を述べている<sup>27</sup>。そこには、『苦海浄土』における病者の表象とつながるものがあるのではないだろうか。

## 第3節 『病草紙』から見た「ゆき女きき書き」の特徴

1. ユーモア、もしくはエンターテインメント性が感じられる表現

『苦海浄土』では、『病草紙』と似てユーモラスな、あるいは一種のエンターテインメント性が溢れる病

者の描写がしばしば見られる。代表としてこれまで述べてきた「ゆき女」の描写を挙げることができる。

「ゆき女」こと坂上ゆき（大正3（1913）年12月1日生まれ、昭和30（1955）年5月10日発病）は、手、唇、口周りの痺れ感、振戦、言語障害、歩行障害、狂躁状態、絶えない舞踏病運動などの症状に苦しめられるが、発病する前にはごく健康で大きな病気に罹ったことはなかったという<sup>28</sup>。

ゆき女は向日性的な性格で、「絶えまない小さきみなふるえの中で、彼女は健康な頃いつもそうしていたように、にっこりと感じのいい笑顔をつくらうとする」<sup>29</sup>。発病のために通じにくくなった「断絶的」な話し方になり、生理帯を自分で洗うことができないうちが恥ずかしさや、せっかくの子を流産させられたことなどの苦痛と心痛を嘆く。その一方、病棟において、ゆき女は人との交流を求め、しばしば隣接する肺病（結核）病棟に遊びに行く。最初、肺病の患者たちは奇病（水俣病）に怯え、ゆきが通るときにうつらないようにと口に手を当てて、息を止めるようにしていた。だんだんとゆきは持ち前の明るさで肺病患者たちと打ち解けてゆき、仲良くなって煙草をもらうようになる。

うちは、ほら、いつも踊りおどりよるように、こまか痙攣をしっぱなしでっしょ。

それで、こうして袖をはたはた振って、大学病院の廊下ば千鳥足で歩いてゆく。

こ、ん、に、ちわあ、

うち、踊りおどるけん、見とる者はみんな煙草出しなはる！

ほんなこて、踊りおどつとるような悲しか気持ちばい。そういう風にしてそこらへんをくるうとまわるのよ。からだかたむけて。

みんなげらげら笑うて、手を打って、ほんにあんたは踊りの上手じゃ、しなのよか。踊りしに生まれてきたごたる。

ここまで踊って来んかいた、煙草やるばい。そぎゃん酔食らいのごて歩かずに、まっすぐ来んかいた。

ほらほら、あーんして、煙草くわえさせてあぐるけん。落とさんごとせなんよ。

うちは自分の手は使えんけん、袖をばたばたさせたまま、あーんして、踊ってゆくもんな。くわえさせてもろて、それからすばすば煙ふかして、すましてそこらへんをまわりよった。みんなどんどん笑うて、肺病の病棟の者は、ずらあ

りと鳥のごと首出して、にぎやいよったばい。うちやえらい名物になってしもうた<sup>30</sup>。

結核病棟を訪れるときは水俣病に由来する舞踏病運動症状を「悲しか気持ちばい」と思いながらも、結核患者にそれを「げらげら」笑われて「踊りの上手じゃ」と言われることを、かならずしも侮辱と思っていない。むしろ煙草の煙をふかしながら、「すましてそこらへんをまわりよった」という、わざと自分の身体の不如意を見せて楽しませるかのごときふるまいに及ぶのである。

ここでゆきは水俣病による舞踏病の症状を「強み」として捉え、自分なりの新しい身体イメージを作り出している。水俣病になる前の人生では農業と漁業以外のことに携わることのなかったゆきは、いまや病院の「舞踏家」というアイデンティティを身につけているように見える。自身の身体を制御できない、あるいは身体が他者化するという<sup>31</sup>「五蘊盛苦」に苛まれても、日常生活の嗜み（煙草）をやめず、他人との交流も意欲的に行っているゆきには、水俣病を自分の生活と人生の一部として取り込もうとする努力と、「症状」を自分の一部として受け止め、その重みを軽減するためユーモアを加えて、新しい自分史を編み出そうとする前向きな意思が見て取れる。『病草紙』の中にも、不可逆的な身体の変質に堪えながら、あたかも病によって他人をおもしろがらせ、病気を積極的に自分の生活の一環として取り入れる病者像が表象されている。「ゆき女」は『病草紙』の病者たちと同じく、他者の苦しみを見て自身の幸せを再確認し、奇妙なものを見る知的刺激を周囲の人間に与えている。そこには病をただ「悲惨なもの」として描かず、病のもつ「エンターテインメント性」というべきものがあらわれている。その悲しみに裏打ちされたユーモアは差別と紙一重であり、やがては「死」に呑み込まれていくものかもしれないが、命の無常と儚さと同時に生きて存在する人間の華やかさを感じさせる。これは石牟礼特有の病者の表象ではないかと考える。

## 2. 「正常」な病のあり方と「異常」な病のあり方

病の経験は常に文化的に形作られている。そこには、「正常」な病のあり方（我々の社会が適切とみなす病いのあり方）と、そこからはみ出た「異常」な病のあり方のふたつが存在する<sup>32</sup>。「五月」に描かれたゆき女と肺病患者たちとの交流には、「肺病（結核）」

／「奇病（水俣病）」：「正常な病のあり方」／「異常な病のあり方」の構図が見て取れる。

それからうちはあの、肺病さんたちのおらす病棟に遊びにゆきおったたい。

あんた、うちたちじゃはじめ肺病どんのにきの病棟につれてゆかれて、その肺病やみのもんたちからさえきらわれよったよばい。水俣から奇病の者の来とる、うつるぞちゅうて。

それでそのうちたちのおる病棟の前をば、その肺病の者たちが、口に手をあてて、息をせんようにして走って通りよる。自分たちこそ感染症のくせ。はじめては腹の立ちよった。なにもすき好んで奇病になったわけじゃなし。そういう特別の見せもんのように嫌われるわけはなかでっしょ。奇病、奇病ち指さして。

それでも後じゃ、その人たちとも打ちとけて仲良うなってから、うちは煙草の欲しかときもらいに行きよった<sup>33</sup>。

結核は、明治時代から昭和20年代までの長い間、「国民病」として恐れられた重大な感染症である。昭和25（1950）年までは、結核による死亡者数は年間十数万人に及び、死亡原因の1位だった。昭和30（1955）年から入院期間の短縮が始まり、病床利用率も減り始めた<sup>34</sup>。このとき、結核は当初の「異常な病」から「正常な病」として社会に受容されている段階にあった。そこに水俣病という「奇病」が現れ、「異常の病」の座を受けついでいる様子がこの場面からはうかがわれる。

『病草紙』に挙げられる病気は当時の「異常な病」だと考えられる。そこでは当時でも珍しい病気が多くを占めている。例を挙げると、「小舌の男」は蝨嚢腫、「頭のあがらない乞食法師」は骨軟化症、「二形」は男性性器と女性性器の両方を有している人、「尻の穴のない男」は鎖肛、「白子」は髪も眉も皆白く、眼に黒眼もない人、「鼻黒の男」は悪性黒色腫と推定されている<sup>35</sup>。『病草紙』は社会に浸透していた「病＝仏罰観」のイデオロギーと病者や障害者の身体イメージとが深く関わることを示している。宗教的な意味づけが病者に対する現実的な差別を助長し、それは視覚的なイメージを介して、より一層強固な通念となって社会に浸透した。社会通念に基づくゆえに、病者が登場する他の絵巻物<sup>36</sup>に描かれた病者たちは概念的に表象され、一人ひとりの個性に乏しい。その姿形や仕草や表情や症状などあらゆる意味で個性

溢れる『病草紙』の病者たちとは異質である<sup>37</sup>。

その中、特に「鼻黒の父子」、不眠症を描いた「不眠の女」、「二形」、口臭を描いた「息の臭い女」、「顔にあざのある女」、「白子」、「侏儒」など、生活の上で著しい不便がない病気に注目したい。これらは「社会化された病気」とも言えるだろう。あざは身体に物理的な苦痛を与えるものではなく、病者にとって社会の中での視線が精神的な苦悩の原因となる。『病草紙』がこうした「異常な病」に光を当てて、社会化された病気の病者の精神的な苦痛を読者に伝える姿勢は、「ゆき女きき書」の病者の描写にも共通しているのではないと思われる。ゆき女は肺病病棟に行った時に患者たちから「水俣から奇病の者の来とる、うつるぞちゅうて」という言葉を投げられる。ゆき女が通ると「その肺病の者たちが、口に手をあてて、息をせんようにして走って通りよる」、「奇病、奇病ち指さして」という酷い差別を受けた。水俣病は身体的症状以外にも病者に社会的かつ精神的な苦しみをもたらすことがここから端的にうかがえる。

#### 第4章 終わりに——病気の共同体

「五月」の四つの語りの層からは、多様な視点から病の全体像を捉えようとする「全体小説」としての野心がうかがえる。病の経験やできごとは常に複数の意味を表し、かつ隠蔽している<sup>38</sup>。水俣病という病が「病者と自己」「病者と家族」「病者と社会」「病者と他の病者」それぞれのネットワークにどのような能力低下（disability）をもたらすのか、石牟礼は四つの視点で丁寧にそれを拾い上げている。病の症状は心理的・社会的・生物学的な原因によって、症状が悪くなる増悪時期と症状が落ち着く静止時期の間を往復する<sup>39</sup>。「五月」に描かれた結核患者たちとゆき女との関わりに伺えるユーモアとエンターテインメント性はゆき女の静止時期の描写に力を注いだものと観察される。

「ゆき女聞き書」と『病草紙』に共通するユーモアとエンターテインメント性は、過酷な世界を生きていくことための覚悟や心の有り様を支えていた庶民的な力である。結核患者からゆき女への揶揄は、もちろん差別的な残酷さを表すが、一方でその中にもゆき女が存在を認め、受容し、どこか愛おしいものと受けとめる感情が混入している。『病草紙』の「眼病治療」の巻には、男性が偽医者によって白内障の治療のため目に針を刺され、血液が噴出している場面が描かれている。そこでは流れる血液を大きな角

盥で受ける女性が明らかに楽しそうに笑っている。それを正面から見ている男、奥の襖を半分開いて見る男女も笑っている。よく見ると、治療を受けている病者も笑みを浮かべているように見える。植田も指摘しているように、おそらく病者は多少の痛みがあっても、病気が治るならという切ない願いで治療を受けている。周囲の人たちの表情には、珍しいものを見る興味と怖さが共存する思いを抱きながら「笑うしかない」という心情を描いた中世の人々の突き抜けたたくましさを感じられる<sup>40</sup>。その楽観的な態度は良い結末に結びついているとは限らない。ゆき女は水俣病で亡くなり、眼病の男は偽医師の治療を受けて片目が見えなくなる結果が待っている。だが、その楽観的な振る舞いは決して苦しみを表面的な笑いで覆い隠すだけではなく、苦痛を諦観と楽観的な態度で克服する強い人間の精神性を表現している。

そしてゆき女と病草紙の病者たちのその楽観とユーモアを選択する生きる姿勢は、実は医学上の「内的健康システム」<sup>41</sup>に沿っている。症状が落ち着いている静止時期に、治癒の神話に代わって、ケアのパラダイムを受け入れ、社会援助の増強（肺病患者がゆき女と良い関係になる）、自己有効性感覚の増大（病院の名物になることに喜びを感じるゆき女）、強い願望の再燃（「眼病治療」の巻で治療を受けた男）によって、病を支配している感覚が増大し、病者の健康にプラスの要素となる<sup>42</sup>。この世は無常であることは変わらないが、病者の周りには彼らの世話をし、手当てをし、祈祷し、揶揄しあい、気に掛け、関わる人々が存在する。病気を中心として人々が集まるといふ不思議な構図が『苦海浄土』と『病草紙』の中に共通して観察される。これは半田結の指摘する「病の共同体」<sup>43</sup>と言える関係である。人々は苦しみによってつながるのではなく、苦しみへの慈しみによって繋がっている。病者と周囲の人々は同じ共同体にいたので、その笑いは嘲笑ではなく、同じく生きる者への慈愛の眼差しとも読み解けるだろう。諦めながらも強く生きる人間の地に足のついた生き方は『苦海浄土』の病者の表象の重要な特徴である。

<sup>1</sup> 渡辺京二「解説」『苦海浄土 わが水俣病』講談社文庫、2004年、pp. 364-386。

<sup>2</sup> 井上洋子「『苦海浄土』の円環構造 「ゆき女きき書」はいかにして語りだされたか」『現代思想』5月臨時増刊号、第46巻7号、2018年、pp. 98-106。

<sup>3</sup> 林宜泰「石牟礼道子『苦海浄土』刊行史および評価の変遷」京都芸術大学大学院紀要2号。

<sup>4</sup> 谷川雁「創刊宣言/さらに深く集団の意味を」『サークル村』1958年9月号。

<sup>5</sup> 井上洋子前掲論文、pp. 105-106。

<sup>6</sup> 石牟礼道子「五月」『新装版 苦海浄土—わが水俣病』講談社文庫、2004年、p. 140。以下、石牟礼道子「五月」からの引用はすべてこの書からとし、石牟礼道子「五月」とページ数のみ示す。

<sup>7</sup> 石牟礼道子「五月」、p. 163。

<sup>8</sup> アーサー・クラインマン著「症状と障害の意味」『病いの語り—慢性の病いをめぐる臨床人類学』江口重幸・五木田紳・上野豪志訳、誠信書房、1996年、p. 6。

<sup>9</sup> 石牟礼道子「五月」、p. 141。

<sup>10</sup> 石牟礼道子「五月」、p. 141。

<sup>11</sup> 石牟礼道子「五月」、p. 142。

<sup>12</sup> 石牟礼道子「五月」、p. 147。

<sup>13</sup> 上野千鶴子「「おんな」の思想—私たちは、あなたを忘れない」集英社インターナショナル、2013年、p. 47。

<sup>14</sup> 井上洋子前掲論文、p. 99。

<sup>15</sup> 石牟礼道子「五月」、p. 149。

<sup>16</sup> 石牟礼道子「五月」、p. 153。

<sup>17</sup> 石牟礼道子「五月」、p. 154。

<sup>18</sup> 石牟礼道子「五月」、pp. 154-155。

<sup>19</sup> 石牟礼道子と田中優子の対談「もだえ神」『苦海・浄土・日本 石牟礼道子 もだえ神の精神』集英社新書、2020年、p. 168。

<sup>20</sup> 安井真奈美編「疫病の流行」『身体イメージの創造—感染症時代に考える伝承・医療・アート』国際日本文化研究センター、2022年、p. 8。

<sup>21</sup> 半田結「絵巻に見る「病のイメージ」」『関西福祉大学社会福祉学部研究紀要』第19巻1号、2016年、pp. 31-42。

<sup>22</sup> 佐野みどり「病草紙研究（上）（下）」『国華』1039・1040号、1981年。

<sup>23</sup> 『病草紙』の中で「笑い」の場面が含まれる作品は、中央公論美術出版『病草紙』（2017年）によれば、「風病の男」、「二形」、「眼病治療」、「陰風の男女」、「頭のあがらない乞食法師」、「息の臭い女」、「眠りの男」、「白子」、「侏儒」、「背の曲がった男」、「肥満の女」である。以下、『病草紙』中の個々の作の呼び方は上記2017年刊行の中央公論美術出版本での呼び方に倣う。

<sup>24</sup> 加須屋誠「総論 病草紙」『病草紙』中央公論美術出版、2017年、p. 87。

<sup>25</sup> 内田啓一監修「はじめに」『浄土の美術』東京美術、2009年、pp. 2-3。

<sup>26</sup> 加須屋誠前掲本、pp. 88-95。

<sup>27</sup> 植田美津恵「『病草紙』による日本人の死生観」『東京通信大学紀要』第3号、2020年、pp. 133-149。

<sup>28</sup> 石牟礼道子「五月」、pp. 148-149。

<sup>29</sup> 石牟礼道子「五月」、p. 189。

<sup>30</sup> 石牟礼道子「五月」、pp. 164-165。

<sup>31</sup> ゆきは自分の体をコントロールできない状況をこう述べている「うちは自分でできることは何もなく。うちは自分の体がましゅうしてたらん。今は人の体のごたる。」石牟礼道子「五月」『新装版 苦海浄土—わが水俣病』講談社文庫、2004年、p. 159。

<sup>32</sup> アーサー・クラインマン前掲書、p. 5。

<sup>33</sup> 石牟礼道子「五月」、p. 164。

<sup>34</sup> 島尾忠男「我が国の結核対策の現状と課題（2）『結核対策のフレームワーク』」『日本公衛誌』第55巻、第10号、2008年、pp. 729-732。

<sup>35</sup> 病名の推定は前掲植田美津恵論文による。



---

<sup>36</sup> 例：「絵因果経」、「八相涅槃図」、「釈迦八相図」第4幅、「一遍聖絵」第7巻、「法然上人絵巻」第16巻。

<sup>37</sup> 加須屋誠前掲本、p. 133。

<sup>38</sup> アーサー・クラインマン前掲書、p. 9。

<sup>39</sup> アーサー・クラインマン前掲書、pp. 8-9。

---

<sup>40</sup> 植田美津恵前掲論文、pp. 142-143。

<sup>41</sup> アーサー・クラインマン前掲書、p. 8。

<sup>42</sup> アーサー・クラインマン前掲書、pp. 8-9。

<sup>43</sup> 半田結前掲論文、p. 41。

## **Patients' representation of the novel "Paradise in the Sea of sorrow (Kukai-Jodo) "—focusing on the depiction of Yuki in "May"**

Lin I Chen

In May 1959, Ishimure Michiko who wrote the novel "Paradise in the Sea of sorrow (Kukai-Jodo) " went to the hospital to visit Sakagami Yuki, who was the first Minamata disease related patient Ishimure came into contact with. From this visit, Ishimure wrote an essay titled "Strange disease (Kibyō) " and this essay was published in the magazine "Circle-Village (Sākuru-Mura) " in January 1960. The "Strange disease" essay was subsequently rewritten and given a new essay title "What Yuki Had to Say (Yukijo-Kikigaki) ". "What Yuki Had to Say" contained two sub-sections, which are "May" and "I Want to Be Human Again". "What Yuki Had to Say" eventually was included as Chapter 3 in the novel "Paradise in the Sea of Sorrow". Due to the essay's initial beginnings, this played a significant role in the Study of Ishimure.

To analyze patients' representation, the author compared the depiction of patient Yuki who's cited in "May" with Yamai no Soshi. Yamai no Soshi is a picture scroll that was created during the medieval period in Japan. It consisted of 21 scenes that portrayed sick people and others surrounding them. Out of 21 scenes found in Yamai no Soshi, 11 of them depicted one or several able-bodied people laughing at sick people. It was conventionally thought that laughter towards sick people was the laughter of derision. The author saw the optimistic strength and a sense of transience held by common people. That was how people coped with life during the medieval period amid the prevalence of sickness and death.

The display of such optimistic strength resonated with the author with regards to the depiction of Yuki in "May". Yuki had disturbance of speech and gait, and due to this, Tuberculosis patients discriminated her as if she was some kind of monstrous freak. Despite this, Yuki was friendly with Tuberculosis patients, poked fun at herself and even danced for Tuberculosis patients in order to make them laugh.

Although the sick people depicted in Yamai no Soshi and Yuki in "May" both shared the same level of optimistic strength displayed by common people, there were no happy ending for both parties. Yuki died from Minamata disease and the sick people depicted in Yamai no Soshi were not completely cured. At any given rate, patients' representation cited in both the Yamai no Soshi picture scroll and in "May" gave us some thought provoking views towards life and death that we all should learn from.